

「孝季・吉次年譜」とその謎

仙台市 菊地 栄吾

(資料1) 『和田家資料3、北斗抄六』(北方新社、p243)

「西海航」

・・・朝幕族は挙げて探求しれけり。吾が道の陸奥にぞ続く 邑辺にも荒覇吐神はありける。久遠の世に一瞬の命を五十年に過ぎ、今年をして六十七を越ゆ。黄泉の道は知らねど、怖しくもなし。・・・

文政二年(1819)五月一日 和田長三郎

資料1は、和田長三郎吉次の誕生年を示す貴重な記録です。文政二年(1819)、67歳、即ち宝暦三年(1753)が誕生年になります。

この年まで、安永三年(1774)から始まった山靱諸国・垂細岬・オリエント巡察の旅を体験し、寛政元年(1789)からは「東日流外三郡誌」に代表される膨大な歴史資料の収集編纂作業が始まり、文政五年(1822)には完成します。

この資料からは、海外における体験、そして30年以上にも渉る編纂作業も終盤を迎えた達成感、満足感が感じられます。

(資料2) 『東日流外三郡誌・第六巻・諸項編』(北方新社、P328～9)

『東日流外三郡誌・第六巻・諸項編』(八幡書店、P64～6)

「東日流往古之謎史跡尋抄」

・・・史跡を探るも易得ならず。峰に見下して近けると感ぜしも、草木に分け入りては方所を失覚し、徒らに歩くも至らぬ多し。わがよわい五十三歳にして、若き頃につかれ覚えぬ山面歩きも、今にして覚ゆなり。

いま求むる踏尋の山は、飛鳥山なる耶馬台城なりしも、原誕の大森林天日をも幽閉して木陰の間より少かなる線光幾筋も暗地にゆらぎ放つるのみなり。・・・

(この部分には、署名・日付なし)

資料2は、後半の往復文書には

寛政四年(1792)七月十日 孝季 華押

寛政五年(1793)四月二日 和田長三郎吉次 華押

寛政五年(1793)五月十八日 秋田孝季

などの日付、署名があります。

資料1で吉次は、この時は40か41歳であり、53歳と記した人物は孝季と考えざるを得ません。また、日付については「十三湊脚歩記」(「東日流外三郡誌・第六巻・諸項編、P322～3」)よると「寛政三年、諸国巡脚を了して、東日流十三湊及び視浦辺の史跡を訊筆せるに及ぶべり」と記した「寛政四年五月、秋田孝季」署名の文書があります。

資料2も、この史跡・訊筆の一貫とする耶馬台城探索に関する記事と考えられるので、日付は同じく「寛政四年五月頃」と推定されます。

結論として、秋田孝季の誕生は、元文五年(1740)となり、吉次は宝暦三年(1753)で、年

齢の差は13歳と考えられます。

(資料3-1)『東日流外三郡誌・第一巻・古代編』(北方新社、P27)

「東日流外三郡誌総序」

「本書原著者・安東孝季七十才翁」と記された肖像画があります。そして、その画像が添付された「東日流外三郡誌」などが文政五年(1822)に三春藩へ提出されたことから、この年が77歳と考え延享三年(1746)を誕生年とする説があります。

しかし、和田家文書コレクション「丑寅風土記・第全六ノ四」「荒木流之事」には、「然るに五十歳を過ぎしより、何事の心改りぞや、帯刀せるなく諸国を漫遊せり。安倍一族に縁れる史跡・文献・縁者の訪問に餘念なかりきも、・・・」とあります。1746年誕生とすると「郡誌」の調査開始の寛政元年(1789)には44歳になり、50歳過ぎではありません。

(資料3-2)『東日流外三郡誌・第六巻・諸項編』(北方新社、P383～4)

『東日流外三郡誌・第五巻』(八幡書店、P680)

「津軽神社絵馬之写」御師像(秋田孝季、七十八才)

自画像(和田長三郎、五十七才)

いずれも「作画日付」なし。

資料2からは、(秋田孝季、78歳)は文化14年(1817)

資料1からは、(和田長三郎、57歳)は文化6年(1809)となります。

絵馬の奉納時期が異なるようです。

(資料3-3)『東日流外三郡誌・第六巻・諸項編』(北方新社、P292)

「東日流外三郡誌著者、秋田孝季翁」「東日流外三郡誌助著者、和田長三郎吉次」と記されておりますが、年齢も作画日付もありません。

(資料4-1)『北鑑・第五十九巻』[一]

・・・都度なりせば、客たるの感、是れなく妹りく、長三郎に嫁して十二年、はや三人の子を生めり。妹りく、余を兄とは呼ぶなく、父と呼ぶるに、我れまたためらはず返事をせるは、りく、幼な頃よりの習ひなり。妹とは申せど歳三十二歳の差にあり、りく、が乳児にて父の他界にありせば、吾れを父と呼ばるは、あどけなき四つばへの頃と覚ひぬ。・・・

孝季日記より(日付無し)

(資料4-2)『東日流外三郡誌・第六巻・諸項編』(北方新社、P374～6)

「思悲別之事」

・・・幼少の頃より心身をこめにして育む娘十七歳に早や親を巢立つ縁まとまりぬ。妻を永病にして男手に育てし娘、自贖乍麗人と想いて巢立つ日の近らむを憎らしき吾が道は、武家にして武家に非ず。・・・ 文政五年(1822)七月 孝季 長三郎殿

拜復 ・・・想ふに、りく嫁ぎして早三十八年の歳月過し候へば昨日の如く浮世

のみずかさをはた思い出らみ候。・・・

長三郎

孝季殿

この二つの資料から孝季の妹りくは、兄孝季とは 32 歳の差があり、安永元年(1772)に誕生し、天明八年(1788)に 17 歳で和田長三郎吉次と結婚したことが分かります。

しかし、吉次は「拝復」の中で、りくの嫁いだ年を文政五年(1822)の 38 年前としておりりく 13 歳となります。これについては、りくが 13 歳から和田家に住むようになり、17 歳になって正式に結婚したとも考えられます。

(資料 4-3)『北鑑・第六十一巻』総集修了[九]

昨今、生保内にて念願なる湯浴を仕り、久方振りにて妻、俱々旅を仕りたり。りくも既に歳、五十一年、七日間の留宿にて帰郷仕り。取急ぎ御翁に書状を奉りぬ。翁との生保内に同道せるは甲寅の七月と覚いたり。・・・

庚申十二年九月二日

吉次

甲寅は寛政六年(1794)、庚申は寛政十二年(1800)で、記年はこの通りであると考えられます。しかし、これまでの検討結果からは、「りく」の年齢が 51 では話が合いません。寛政十二年の年齢は 29 歳のはずでした。

「五十一」を「三十一」と読み替えても、2 歳の差が残ります。吉次は妻・りくの歳を間違えて覚えていたのでしょうか。

(資料 5-1)『東日流外六郡誌絵巻全』(津軽書房、P250)

『東日流外三郡誌・第三巻・中世編(二)』(北方新社、P21)

「秋田孝季殿系図抜抄」隆季(改孝季)

天保三壬申年四月七日寂 行年六十三歳 法名大光院石祇覚明

右之通秋田隆季儀改孝季事不誤菩提念可

明治己巳年(2年、1869)四月七日 和田長三郎末吉

(資料 5-2)『東日流外六郡誌大要』(八幡書店、P453~4)

第三十追補「三春様之事」

・・・拙者既に歳八十六を過ぎにして逝ける日も近きに覚りぬ。心定り、この先はただ天命に安ずる耳にて、生を限りに是を書連らねて遺し置きぬ。三春様に献上せしは未だ果されず、心苦しき哉。・・・(記入者、記入日付は無いが、文面から孝季と考えられる)

これまでの検討では、孝季 86 歳は文政八年(1825)となります。

(資料 5-3)和田家文書コレクション『創世之事』

「外藩古事録に當りて」

この文書は、「辛卯年(天保二年、1831)十一月廿日 孝季翁」と記入されており、高山彦九郎、林子平、菅江真澄らとの交流の思い出が綴られております。そして、孝季翁は、この年 92 歳になっております。

(資料 5-4) 和田家文書コレクション『創世之事』

「孝季入滅之事」

天保二年十二月三日、長時咳に苦しみ、丑の刻に逝けり。遺言ありて石塔山に埋む。佛事法要一切辞し、戒名亦、辞したり。唯、荒霸吐神の唱題耳にて葬むれり。

天保三年二月七日 長三郎吉次

この資料には、孝季の没年を明記しております。資料 5-1 には天保三年は「壬申」としてありますが、この年は「壬辰」で誤記と考えられます。しかし、二年と三年の違いは残ります。

資料 5-4 からは、「天保二年十二月三日」に孝季は亡くなり、吉次が諸事万端を処理し翌年の二月に記録した事が分ります。そして、四月には何らかの慰霊行事があり、これが

資料 5-1 の明治二年の長三郎末吉の記録になったと想像されます。

さらに、63 歳と記されておりますが、93 歳との違いは「六」と「九」の誤読・誤記と考えざるを得ません。

(資料 6-1) 『東日流六郡誌大要』(八幡書店、P1037)

「坂東平氏胤和田系図」(抜粋)

第四十三代 和田長三郎吉次 壱岐守

文政甲申(七)年九月三十日寂

神明 巖鬼山大彦命

明治甲辰(三十七)年正月元旦 和田長三郎末吉

(資料 6-2) 和田家文書コレクション『創世之事』

「長三郎日記」

歳の移り逝く速やかなる事、八十年の昔も過ぎぬれば昨日の如し。孝季翁に従へて三十餘年の歳月を渡りて、諸国の候に旅歩くまま、その史傳完遂を得られず、吾も亦、老令盡せり。・・・ 天保二年(1831)十一月廿日 長三郎

これは、資料 5-3 と同じ日に書かれたもので、この年、吉次は 79 歳であり間もなく 80 歳を迎えるところで「八十年の昔」は符号しております。

ところが、資料 6-1 の「文政甲申(七年、1824)」は、吉次 72 歳となり、80 歳を越えたとの「日記」に合いません。明治の過去帳による伝承が問題なのでしょうか。

想像を逞しくすれば、これまでの検討の中でも、「干支」や「年齢の数字」の誤読・誤記があったことから、「文政甲申」と「天保丙申」の混同が考えられます。吉次の没年は天保丙申(七年、1836)、84 歳と想定されます。

孝季は 92 歳、吉次は 84 歳と、長命です。江戸時代に、これ程の高齢者が居たかという疑問を持たれるかもしれませんが、最後に次の資料を紹介しておきます。

『江戸時代の超高齢者(仙台藩 1737-1866 年史料に見る)』高木正朗

一立命館産業社会論集—第 49 卷第 2 号(2013 年 9 月)

「・・・80 歳以上者は 1,000 人当たり 5 人余り、90 歳以上者は 0.5 人程度に保たれてきたとの結論に達した。・・・」

「孝季・吉次年譜」と、その謎

菊地栄吾

西暦	元号	干支	孝季	吉次	りく
1740	元文 5	庚申	1		
1741	寛保 1	辛酉	2		
1742		壬戌	3		
1743		癸亥	4		
1744	延享 1	甲子	5		
1745		乙丑	6		
1746		丙寅	7		
1747		丁卯	8		
1748	寛延 1	戊辰	9		
1749		己巳	10		
1750		庚午	11		
1751	宝暦 1	辛未	12		
1752		壬申	13		
1753		癸酉	14	1	
1754		甲戌	15	2	
1755		乙亥	16	3	
1756		丙子	17	4	
1757		丁丑	18	5	
1758		戊寅	19	6	
1759		己卯	20	7	
1760		庚辰	21	8	
1761		辛巳	22	9	
1762		壬午	23	10	
1763		癸未	24	11	
1764	明和 1	甲申	25	12	
1765		乙酉	26	13	
1766		丙戌	27	14	
1767		丁亥	28	15	
1768		戊子	29	16	
1769		己丑	30	17	
1770		庚寅	31	18	
1771		辛卯	32	19	
1772	安永 1	壬辰	33	20	1
				(資料4-1)	
1773		癸巳	34	21	2
1774		甲午	35	22	3
				(孝季ら亜細亜巡察へ)	
1775		乙未	36	23	4
1776		丙申	37	24	5
1777		丁酉	38	25	6
1778		戊戌	39	26	7
1779		己亥	40	27	8
1780		庚子	41	28	9
1781	天明 1	辛丑	42	29	10
				(孝季ら山廻巡察へ)	
1782		壬寅	43	30	11
1783		癸卯	44	31	12
1784		甲辰	45	32	13
1785		乙巳	46	33	14
				(三春藩大火災)	
1786		丙午	47	34	15
				(孝季・吉次ら北探の旅へ)	
1787		丁未	48	35	16
1788		戊申	49	36	17
				(孝季ら帰国) (資料4-2)	
1789	寛政 1	己酉	50	37	18
				(郡誌の調査開始)	
1790		庚戌	51	38	19
1791		辛亥	52	39	20
1792		壬子	53	40	21
				(資料2)	
1793		癸丑	54	41	22

西暦	元号	干支	孝季	吉次	りく
1794	寛政 6	甲寅	55	42	23
1795		乙卯	56	43	24
1796		丙辰	57	44	25
1797		丁巳	58	45	26
1798		戊午	59	46	27
1799		己未	60	47	28
1800		庚申	61	48	29
				(資料4-3)	
1801	享和 1	辛酉	62	49	30
1802		壬戌	63	50	31
				(資料5-1)	
1803		癸亥	64	51	32
1804	文化 1	甲子	65	52	33
1805		乙丑	66	53	34
1806		丙寅	67	54	35
1807		丁卯	68	55	36
1808		戊辰	69	56	37
1809		己巳	70	57	38
				(資料3-2)	
1810		庚午	71	58	39
1811		辛未	72	59	40
1812		壬申	73	60	41
1813		癸酉	74	61	42
1814		甲戌	75	62	43
1815		乙亥	76	63	44
1816		丙子	77	64	45
				(資料3-1, 2)	
1817		丁丑	78	65	46
1818	文政 1	戊寅	79	66	47
1819		己卯	80	67	48
				(資料1)	
1820		庚辰	81	68	49
1821		辛巳	82	69	50
1822		壬午	83	70	51
				(郡誌完成、三春藩提出) (資料4-2)	
1823		癸未	84	71	52
1824		甲申	85	72	53
				(資料6-1)	
1825		乙酉	86	73	54
				(資料5-2)	
1826		丙戌	87	74	55
1827		丁亥	88	75	56
1828		戊子	89	76	57
1829		己丑	90	77	58
1830	天保 1	庚寅	91	78	59
1831		辛卯	92	79	60
				(資料5-3, 4)	
1832		壬辰	80	61	
				(資料5-1, 4)	
1833		癸巳	81	62	
1834		甲午	82	63	
1835		乙未	83	64	
1836		丙申	84	65	
				(資料6-1, 2)	